

導入される過程を検討している。そこでは、各専門家が欧米に学んで持ち込んだモデルが素地となり、また1920年代以降に展開したモダニズムの影響を受けている。今回の調査は、こうした日本の台所の近代化過程に影響した事物について、フランスにおける非文字資料を含む台所関連資料の分析および視察を行うものである。

今回の派遣調査は2012年10月19日より同年11月7日にかけて、フランス国立高等研究院においてジョセフ・キブルツ教授の御指導のもとに調査研究を行った。調査方法は、①生活史・技術史・建築史を扱う関連博物館における展示内容の視察、②図書館における関連資料の収集、③建築家ル・コルビュジエ (Le Corbusier) の住宅作品における台所の視察、④関係専門家からの情報収集の4点を中心とした。

なかでも実見できる台所はすべて視察することを目指して、台所空間、台所設備およびそれらを中心とした水廻りや平面プランについて観察した。具体的にはル・コルビュジエの住宅作品のうち、見学可能なラロッシュ・ジャンヌレ邸 (Villas La roche et Jeanneret, 1923-5)、サヴォア邸 (Villa Savoye, 1931)、ル・コルビュジエのアパルトマン (L'appartement 24 N.C., 1931-4)、ロンシャン礼拝堂 (Notre-Dame-du-Haut, 1950-55) を訪問した。また、コルビュジエ財団が発行する関係資料を入手することができ、見学不可能なものの資料的補足が可能となった。建築・文化財博物館では、彼の住宅作品のひとつである、ユニテ・ダビタシオン (Unité d'habitation, 1945-52) の実物大模型が展示され、台所空間を実見できた。台所近代化に大きな影響を及ぼしたとされるコル

ビュジエは、機械化や合理化を建築に適用するため、家事労働や住宅設備を建築のデザインに取り入れ、台所にもそうした考え方を適用していた。「台所は神殿とはいわないまでも、家の中で最も重要な場所のひとつだ。台所も居間も人が生活する場所であるから。」(Complete works 1929-34, p.29) というサヴォワ邸に関して残した言説からも、台所のデザインを重視していたことが分かる。前川國男、坂倉準三、吉阪隆正といった彼の弟子たちをはじめとする日本の建築界をリードした建築家たちに大きな影響を与えた人物であり、その意味でも、コルビュジエの台所デザインは、台所の近代化に直接的な影響力を持っていたと言えるであろう。

さらに、キブルツ教授よりエコール・デ・ボザール (Ecole des Beaux-Arts) の Catherine CLARISSE 教授を御紹介いただいた。教授はフランスにおける台所史の研究者としては第一人者であり、台所の近代化における台所空間の規模や改良理論の適用と建築的解釈について、本研究と共通した視点でヨーロッパの台所の近代化を著されている。教授と面会でき、御助言いただけたことは、本研究にとって非常に有益なものとなった。

今回の海外派遣では、文献資料の収集、関連博物館の視察、および台所近代化に大きく影響した一人であるル・コルビュジエの住宅作品の台所の視察を通して、現地調査によってのみ可能な成果を得ることができた。今回の調査研究で得られた成果を生かし、ヨーロッパにおける台所近代化がわが国のそれにどのように影響を与えたのかという視点をもって、日本の台所近代史の研究に取り組む所存である。

出稼ぎ「農民工」の生活現状及び都市における 民俗事象に対する受容 —広州市、東莞市における「農民工」を事例に—

王新艶

(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)



2013年2月18日から3月10日まで、私は非文字資料研究センターの派遣研究員として中国・中山大学非物質文化遺産研究センターを訪問し、広州における「農民工」の現状の生活と心理について調査する機会を頂いた。指導教授の劉先生、非物質文化遺産研究センター長の康先生、及びチューターなどのお蔭で、現地調査と文献資料の収集もうまくいった。

広州市は珠江デルタにおける最大の都市として、30

年前から「農民工」の出稼ぎ先となっている。中国労働社会保障省の統計によると、2010年広州市の外来農民工の数は1710万人に達した。1989年の117万と比べ、20年間で14.6倍に増えた。同じく広東省に属する「世界工場」と呼ばれる東莞市も、2012年までに外来農民工数が当地人口数の3倍余となって、523.46万人となった都市である。したがって、今回の調査は広東省の広州市と東莞市を選んだ。



写真1 春節後広州に戻る農民工

地縁の関係で、広州市と東莞市の農民工たちの約85%は南方人である。調査によると湖南省、湖北省、四川省、広西省が上位四省となっている。北方人もいるが、数は少ない。その中では河南省の人が一番多い。その2つの都市の「農民工」の概況を把握する上で、21人の農民工に対して聴き取り調査を行った。南北間で風習が大分違うことから、今回は主に北方から来た農民工を調査対象とした。そうすることで、彼らの、都市における年中行事などの民俗事象に対する受容程度が比較的分かりやすくなると思ったからである。

北方から来た21人の出身地は主に河南省、東北地区、河北省、山東省であった。調査した2月中旬はちょうど春節が終わった後で、農民工たちは農村から出稼ぎ先に戻る時期であった(写真1)。春節の風習において、“餃子を食べるかどうか”ということは南北間の一番の違いである。その問いについて、21人の中で、回族¹の5人を除き、14人が春節の時、餃子を食べると回答した。即ち、87.5%の人が自分の故郷の風習を守っているというのが分かる。南方の風習に従っている2人のうち、自発的に食べないというものは1人しかいなかった。それは、伝統的な風習が持つ、人々への影響力の強さを証明できるものだろう。言い換えれば、農民工たちは、一年のうち、都市にいる時間が長いものの、人々の心に深く刻み込まれているのはやはり農村の伝統なのである。

上述のように、農村と都市、双方を行き来し生活している「農民工」は、自らの農村の民俗文化を心に刻んだまま、都市で生活する。また、逆に、都市の生活のなかで経験した文化を自らの農村に持ち帰る者もある。しかし、実際には村落の伝統的な風習に従うことが顕著である。

¹ 中国の少数民族の一つで、中国最大のムスリム（イスラム教徒）民族集団。



写真2 農民工博物館の内部

紙面の都合上、ここではその原因の概略についてのみ述べようと思う。一つの原因としては、彼らの故郷の伝統的な風習が持つ力が強いということが考えられる。もう一つは、地域において伝承されている風習で年中行事を行うということは、人々の心の中で、自分がその土地の人間であるという自己証明になるものと考えられる。どこのやり方でやるのかということが、自分がどの人であるかという証明になるというのは、一般的な認識であろうと思う。長年、都市で働いている農民工たちは、「都市人」、あるいは「当地人」という意識がない。それは調査した際、筆者が強く感じた。

今回の調査で資料を調べているうちに「農民工」問題は今、中国で社会学、法律学、文学など様々な分野で注目されているということが分かってきた。それらの文献資料を参考にした上で、日本の出稼ぎ問題研究著作を対比し、中国の出稼ぎが特有な性格を持っていることも分かった。1980年代ごろに『出稼ぎ労働と農村の生活』(渡辺栄・羽田新 1977年)、『出稼ぎの総合的研究』(同1987年)などをはじめとする日本の出稼ぎについての沢山の研究がある。それによると、日本の出稼ぎというのは、ほぼ男性が単身で行っていた。一方、中国では、家族を伴う人が多い。従って、女性の家族における機能の変化はそれぞれで違う。この研究については、今後の課題だと思っている。

また、今回の調査で、中国における最初の「農民工博物館」(写真2)を見学した。ここでは、広州市の農民工の歴史及び動向が把握できるようになっている。聞き取り調査で得た農民工たちのライフストーリーを整理し、民俗学の視点から農民工問題を考察するということも、今後の筆者の課題だと思っている。